

ショートフィルム

「49日のレッスン」

(20分)

脚本 大岡俊彦

【登場人物】

康恵 (28)
アマチュア写真家。
現在、幽霊。

北原 (30)
康恵の残された夫。
登山が趣味。

浦辺 (30)
北原の同僚。

メグ (27)
カメラ女子。

○北原の部屋

登山雑誌を切り抜いている北原(30)。ハサミで写真を切り、地図とともにスナップしていく。

ピンポンが鳴り、宅配便が。

受け取った小包は、海外から。

北原 「康恵ー。お前また勝手に買いやがったな？ 俺に黙って」

康恵(28) 「えー、やっとなたのかーそれー！ 思ったよりかかったわー！」

北原 「もう他にないだろうな？」

康恵 「マジそれで最後だよ！ あー会いたかったよおー」

小包を持った北原の周りを、犬のように回る。

北原 「開けていい？」

康恵 「うん」

北原、ハサミを使って荷物を開ける。中から出てきたのは、クラシクなカメラ。

康恵 「いや、これの何が他と違うんだよ、って言うんでしょ？ レンズがね、1・2なんだよ！ 深度の浅さがたまらんの！

分らない？ 口径がこんなにちっさいのに1・2だぞ！ ボディもかわいいし、『状態良』なんてめったに出ないし！」

北原 「(無視して) ……何がうんだよ、これ」

ごとり、と祭壇に供える。

たくさんのクラシクカメラが置いてある。

骨壺。その前に康恵の写真。

康恵、カメラを触ろうとするが、手が透けて触れない。

康恵 「…触ってみたかったなあ…」

北原 「…」

康恵、隣に座り北原の頭を撫でてあげようとするが、手が透けて通過してしまふ。

北原 「(遺影に向って) お前、何で死んだの？」

康恵 「(悲しく笑う) ……わかんない」

康恵の遺影にタイトル。

T 『49日のレッスン』

○居酒屋

同僚の浦辺(30)と飲む北原。

浦辺 「四十九日が終わるまでは、魂はそのへんに漂ってるって言うじゃん？」

康恵、となりの席に座っている。

康恵 「そうだよそうだよ！ こんな感じにね！」

北原 「うん。俺もそう信じてるよ。だから彼女に時々話しかけてるんだよね。そこにいると思っさ」

浦辺 「身近な人が亡くなると、そうする人が多いって聞くな」

康恵 「そうなんだ。じゃあ普通なんだね！ 気が狂っちゃったわけじゃないんだね！」

北原 「そうか」

浦辺 「ちよトイレ行ってくる」

席を立つ浦辺。
浦辺目線では、見えない人と喋っている北原がいる。

○駅からの帰り道、深夜

フラフラと歩きながら。

北原 「あー、ひさしぶりに酔った」

康恵 「そうだよ、飲みすぎだよ」

北原 「そんなこと言ったって、もう止める人がいないんだからしょうがないだろ」

通行人が通る。

北原、通りすぎるまで黙る。

通行人目線では、康恵はいない。

康恵 「だから気を付けてね。もう私止められないんだから。あなた酒に弱いんだから」

北原 「…」

ふと、立ち止まる。

北原 「康恵」

康恵 「なに？」

北原 「お前、あのカメラで何撮るつもりだったの？」

康恵 「いっっぱいあるよ！ 順番に言っていない？ えっと……」

北原 「俺、あのカメラ使っている？」

康恵、はげしくうなづく。

康恵 「あ、でも、カメラ分る？」

○北原の部屋

北原 「わっかんねー……」

フィルム装填の時点ですまづいている。

北原 「この向きであってんの？」

康恵 「違う！ 反対！ 爪があるでしょ？ それじゃ引つかかっちゃう！」

北原 「こう？」

康恵 「逆！」

北原 「これ？」

康恵 「逆の逆！ ……あ、じゃ、合ってる」

北原 「こうか」

康恵 「あ、フィルム引き出しすぎ！ 絶対巻き取りミスする！」

蓋をうまく閉められない。

康恵 「もうだから言ったでしょ！」

北原 「イソって何？ この記号何？」

康恵 「アイエスオーって言ってフィルムの感度で、シャッタースピードがこれで、絞りと露光時間があって、フィルムの感度合わせだ……」

北原 「まあいいや。やってみよう」

○公園

カメラを構える北原。

康恵 「まずファインダーから違うし」

北原 「？ ああ、これか（覗き窓を変える）ぱしやり、ととりあえず撮る。」

北原 「……どこに今撮った写真出てくんの？」

康恵 「スマホじゃないんだから出てくるわけないでしょ！」

北原 「ああ、そっか。スマホじゃないのか」
フィルムを巻かずに次のシャッターを切る。

康恵 「あー。二重露光ーあとで後悔ー」

北原、スマホの解説ページを見ながら。

北原 「何？ 巻く？ どうやんの？」

ぎりぎり、とフィルムを巻き取る。

北原 「ああ、中でフィルムがこれで巻物みたいになってんのか。なるほどね」

康恵 「そうそう。いいじゃん。次は猫でも撮ってみ？」

北原 「よし、次は滑り台でも撮ってみるか」
ただ立ってカメラを構える北原。

康恵 「それじゃふつつーの写真になるでしょうに！ もっと下から行くとか、変わった角度を見つけたら！ 光の当たり方を見るとか！」

北原 「……なんか詰まんないな」

康恵 「そうそう！」

滑り台に座って滑りながらシャッターを切る。

康恵 「斬新すぎるでしょ！ ていうか絶対ぶれてるよ！」

北原 「……こんなもんか」

康恵 「飽きるの早っ！」

○後日、写真屋の前

現像した写真を見る北原。

二重露光。公園。滑り台。手ぶれ。

空。なんかよくわからない光。

北原 「……まともなの、一枚もねえ」

○北原の部屋

写真を並べて落ち込んでいる北原。

康恵 「まあそう落ち込まないでよ。初心者にしては上出来よ。フィルム装填できたのよ？ えらいえらい」
北原、立ち上がる。

○康恵の部屋の前

ノックする北原。
北原 「入るよ。いいかい？」
康恵 「(横で) どうぞ」

○康恵の部屋

写真がパネルになって飾ってある。
コルクボードには、たくさんのスナップ写真。機材も放置されたまま。
本棚の本を探す北原。

北原 「バカでもわかる写真入門みたいな本ない？」

康恵 「あるよ！ 私が最初に買った本がある！ それ見たら大体OK！」

本棚を探す北原。

康恵、一冊の本を手にかけて、思い切り引き出そうとする。

康恵 「うーん！ ちょっと待って！ うーん！」

めちやくちや力を入れて本を引っ張る。
北原の後ろで本が少しずつ出てくるのに、北原は気づかない。
どさりと床に落ちる音。

北原 「ん？ (下を見て) あるじゃん！ 『バカでもわかる写真入門』という本。」

○後日、路上で写真を撮る北原

○後日、遊園地で写真を撮る北原

どこにでも、康恵はついてきている。

○後日、公園

北原 「……あ」

北原、誰もいないベンチにカメラを向ける。

北原 「これ、あの写真と同じ場所でしょ」

康恵 「正解」

回想。康恵の部屋のコルクボード。

ベンチで寝てる北原を撮った写真。

北原 「この距離くらいかな。高さは……こ
うか。絞りは浅めで……シャッターはまあ
ゆるくてもいいか……」

康恵、写真の中と同じポーズを取る。

北原は、だれもいないベンチの写真を撮る。

○路上

北原 「あ、ここもだ」

康恵 「正解」

カメラを構える北原。

アングルに入る康恵。

誰もいない路上のシャッターを切る北原。

○夜、北原の部屋

スクラップブックから、高尾山の地図を出している北原。

北原 「なあ康恵」

康恵 「何？」

北原 「俺、思い出したよ。高尾山連れてったときのこと。覚えてる？ お前が登山道にない道をこっちだーって走って行って、迷い道に入ったときのこと」

康恵 「それでもう二度と山には付き合わないって決めました」

北原 「いや、初心者向けの山だと思ったんだぜ？ それが勝手にお前が中級者コースに変えやがって」

康恵 「だって面白そうだったんだもん」

北原 「その先で見つけた滝、覚えてる？あれ結局地図に載っていないんだよ。幻の滝、的な？」

康恵 「そうなのよ！フィルム切れて、あの滝の写真撮れなかったの！」

北原 「俺、あの滝をもう一度探しに行こうと思うんだよね」

○高尾山山中

きちんとした装備で来る北原。カメラを首から下げている。
普段着のままの康恵。

○同、分かれ道

北原 「康恵」

康恵 「何？」

北原 「お前がこのカメラで何を撮ろうとしていたか、俺分かっちゃったよ」

康恵 「なんででしょう」

北原 「俺でしょ」

康恵 「……（顔を真っ赤にする）」

北原 「だってコルクボードの写真、全部俺か二人の写真ばっかじゃん。パネルの写真も二人で行ったところばっかじゃん。お前、俺のこと猛烈に好きだったろ」

康恵 「……（うなづく）」

北原 「なんだよ。何でそんなことお前がいなくなってから気づかなきゃいけないんだよ！分かってなかったことはないよ？でもさ、本当には分かっていたんだよ！お前がそんなに俺を好きだなんてさ！俺、お前にそんなだけお返ししてたか？適当に返事してただけなんじゃないのか？」

立ち止まる北原。

後ろから抱きしめる康恵。

北原 「何でお前死んだの？何でお前カメラ残していなくなったの？」

涙が止まらない北原。
康恵 「私だって……死にたくて死んだんじやないんだよ？ 出来ればずっとあなたといたかったんだよ？ もうあとちよつとしか一緒にいられないんだから、泣かないで暮らそうよう……」

涙が止まらない康恵。

北原 「(ふと気づく)」

分かれ道に、歩いていく。

北原 「このへんじゃなかったっけ」

康恵 「そう。ここ。ここだよ！」

北原、通りすぎてしまう。

康恵 「こつち！ こつちだつてば！」

北原、遠くへ行ってしまう。

康恵、ものすごく力を入れて枝をゆする。枝はびくともしない。

康恵 「こつち！ こつち！」

めちやくちやに力を入れて、ようやく枝が動く。身体ごとゆする。

ようやく、カサつと鳴る。

北原 「ん？(振り向き、戻ってくる)」

康恵、ガッツポーズ。

道なき道に分け入る北原。ナタを出し、下草を払う。

○滝

二人、滝の前でたたずむ。

北原、カメラを構えてシャッターを切る。

北原 「ここだ……。お前を、ここに連れてきたかったんだ」

康恵、北原の隣に座り、肩を寄せる。

北原、夢中でシャッターを切りまくる。

○小さな展覧会

その滝の写真が佳作に入賞して、パネルで飾られている。

たくさん人が見に来ていて、北原は小

声で康恵としゃべる。

北原 「(小声)俺、写真の才能ちよつとあるかもな」

康恵 「私が見つけた場所なのにー。まあいいよ。手柄は譲るよ」

そこにカメラ女子のメグ(27)が話しかけてくる。

メグ 「あの、この写真を撮った方って聞いたんですけど」

北原 「あ、はい」

メグ 「ここどこですか？　ここで撮ってみたい」

北原 「あー、これは……ちよつと秘密の場所なので」

メグ 「あ……そうですか……そうですね……すみません」

康恵 「あほか！　女子から話しかけられるチャンスなんてめったにないだろ！　生かせ！　ほら！　行ってこいよ！」

北原 「……」

北原、メグを追いかける。

北原 「あの、やっぱり教えます」

メグ 「え、ほんとですか？　遠いんですか？」

北原 「いや、高尾山すよ、すぐそこ」

メグ 「えー、行ってみたい！」

康恵、北原に何度も肘打ち。

北原 「あ……じゃあ、行ってみます？」

康恵 「よく言った！」

後ろから頭をはたく康恵。

誰もいないのに頭を叩かれたような気がして、後ろを振り向く北原。

メグ 「？」

北原 「いや、えーと、そうだ、高尾山の、登山口があるじゃない？」

メグ 「はい」

康恵、展覧会場をあとにする。

後ろを振り返る。

北原とメグ、話が盛り上がっている。

康恵 「知ってた？　今日が49日目って」

メグと笑う北原。

微笑む康恵。

康恵 「泣いてるあなたは、あなたじゃないから」

康恵、手を振る。

康恵のいた場所には、もう誰もいない。